

私は、とり憑かれた女。



●カンヌ映画祭最優秀主演女優賞受賞

イザベル・アジャニーニ、美しさは感性にしみわたる……

# ホゼツンヨ

愛は妄想なのか

憑依

キケンな愛の黙示録が

はじまる……

■アンジェイスラウスキー監督作品



POSSESSION



配給 大映株式会社

●製作総指揮/マリー=ロール・レイル ●脚本・監督/アンジェイスラウスキー ●特殊効果/カルロ=ランバルティ  
●撮影/フルーノ=ニューイッテン ●美術/ホルガー=クロス ●音楽/アンジェイ=コージンスキ  
フランス・西ドイツ合作 ●オリア=ヌ=プロダクションズ、マリアンヌ=プロダクションズ、ローマ=フィルム=プロダクションズ製作  
(キャスト) ●イザベル=アジャニーニ ●サム=ニール ●ハインツ=ベネント ●マルジ=カルステンセン



# ポゼッション

◆'81カンヌ映画祭最優秀主演女優賞受賞

◆'81セザール賞最優秀女優賞受賞

製作総指揮……………マリー＝ロール・レイル  
脚本……………アンジェイ・スラウスキー  
監督……………アンジェイ・スラウスキー  
撮影……………ブルーノ・ニュイッテン  
美術……………ホルガー・グロス  
音楽……………アンジェイ・コージンスキー  
編集……………マリー＝ソファ・デュブ  
特殊効果……………カルロ・ランバルディ

製作……………オリアーノ・プロダクションズ(仏)  
……………マリアンヌ・プロダクションズ(仏)  
……………ゾーマ・フィルム・プロダクション(西独)  
キャスト/イザベル・アジャーニ/サム・ニール/ハ  
インツ・ベネント/マルジ・カルステンセン/ミシェル  
・ホーベン  
●1980年/フランス・西ドイツ合作/カラー123分/ヴィス  
タ英語オリジナル・バージョン●配給/大映株式会社

カンヌ映画祭最優秀主演女優賞に  
輝く不世出の傑作!  
きわだつ美しさと演技  
イザベル・アジャーニ……………

映画ファンならずとも、このイザベル・アジャーニに美しさを感じない人は数少ないのではないのでしょうか。透き透きような肌と整った顔立ち、そしてどこからともなく漂う愛らしさ。パリ・ジェヌヌの代名詞といっても過言ではないでしょう。最新作ではウォーレン・ビーティ、ダスティン・ホフマンと共演した『イシュタール』(87)が記憶に新しいところですが、アジャーニを名実ともに国際的大女優に仕立て上げた記念すべき作品はこの『ポゼッション』をおいて他にありません。人間の業を背負ってしまった一人の女の狂気を、文字通り精神と肉体を投げ出して演じ切っています。名門コメディ・フランセーズの最年少女優として鍛えられた適確な演技力は、鬼才スラウスキー監督の手によって見事にそれまでの殻を破り、開花したといえます。特筆すべきこの演技で彼女は堂々'81カンヌ映画祭最優秀主演女優賞、'81セザール賞最優秀女優賞を獲得、ヨーロッパを代表する世界的スターの座にのしあがることになります。映画祭はもちろんのこと、パリでの公開でも大好評を博し興行的にも成功を治めました。日本でも以前から上映が望まれていましたがなかなか機会に恵まれず、まさに不世出の傑作の待望の登場といえるでしょう。



女優作りの魔術師スラウスキー、  
苦悩と官能の世界は  
暴力的なまでに鮮烈に……………

『私生活のない女』(84)『狂気的愛』(87)と日本でも大いに話題となった作品をひっさげて、いまやヨーロッパを代表する監督となったアンジェイ・スラウスキー。この『ポゼッション』は、まざれもなくその独特の映像世界を見事に現実のものとした、スラウスキーを代表する作品のひとつです。女優作りの魔術師と呼ばれる彼は『狂気的愛』でソフィー・マルソーを、『私生活のない女』でヴァレリー・カプリスキーを、そして『ポゼッション』でイザベル・アジャーニを、すさまじいまでに演じ切らせています。可憐なスター女優をこんなにまで遠慮もなくひきずりまわし、そこから魂と肉体に引き裂かれた女の悲痛な叫びを抽出してみせた演出家は、過去いなかったのではないのでしょうか。その成果はこの映画でも、彼独特の苦悩と官能の映像世界として暴力的なまでに鮮烈に描き出されています。ちなみに題名の『ポゼッション』は「所有」の意味から転じて「憑依」「悪魔つき」の意味。まさにショッキングな内容を象徴していると言えます。それはスラウスキー自信「個人的映画(パーソナル・フィルム)」としてはばからないとおり、少しばかり過激ではあるけれどしかし確実な、人間の意識の「内側への旅」のアプローチなのです。



## ストーリー

東側との「壁」に近い、西ドイツの小都市に、ひとりの男が帰ってきた。

彼の名はマルク(サム・ニール)。数年間の単身赴任を終え、妻子の待つアパートに戻ったのだ。ところが、幼い息子のポプ(ミシェル・ホーベン)と、夫の帰りを心待ちにしていたはずのアンナ(イザベル・アジャーニ)の態度は妙によそよそしい。「いったい何が不満なんだ? 僕が戻ったというのに」そのうちマルクは、アンナが夜な夜なアパートから姿を消すことに気づく。彼女は、結婚生活からも、母親業からも、そして自分自身からも逃れたい気持ちでいっぱいだったのだ。「他に男がいるのではないか」というマルクの疑いは、あっさり肯定される。彼女には愛人がいたのだ。

アンナの女友だち、マルジ(マルジ・カルステンセン)から、ハインリッヒ(ハインツ・ベネント)の存在を聞き出したマルクは、彼の豪華な住いを訪れる。生真面目なマルクとは正反対の快楽主義者ハインリッヒは、素直にアンナとの関係を認めた。だが彼もまた悩みを抱えていた。アンナには「第3の男」がいるらしいのだ。

思いあまったマルクは私立探偵を雇い、「第3の男」を突き止めようとした。しかしアンナの尾行を引き受けた探偵は「セバスチャン街87番地」という電話を最後に、連絡を断ってしまう。

一方、セバスチャン街からマルクのアパートに通うアンナは日ごとに様子がおかしくなっていた。放心しているかと思えば「私は淫売よ!」と泣きわめく。家に戻ってくれ、と懇願するマルクの目の前で自殺を図る――。

そんなある日、ポプの通う小学校の担任教師がマルクの家を訪ねて来る。一見、元気そうなお母さんが、屋敷の時間になると、母親を求めて泣き出す、というのだ。アンナとのいさかいに疲れ切っていたマルクは、妻によく似たヘレンに甘えるように、身体を重ねるのだった。

アンナの裏切りに業を煮やしたハインリッヒは、花束を持ってセバスチャン街のアパートへ彼女を訪ねた。そこで彼女の秘密――「第3の男」を目撃した彼は、半狂乱になって逃げ出してしまった。

教会のキリスト像を見上げ、子どものように泣き出す。地下道で何かに憑かれたように身をくねらせ、体液を絞り出すかのように嘔吐する。洗濯物を平然と冷蔵庫に押しこむ――アンナの行動はますます不可解になってゆく。

彼女を理解できず、困惑するマルクに向かって「私はもう何も感じないのよ!」と絶叫するアンナ。長い単身赴任の間、夫は私を裏切り続けた…彼女の妄想はいつの間にか、アンナ自身の現実を歪めていたのだ。彼女を妄想から救い、所有するためには、お互いの肉体を滅ぼすしかない――マルクはついに、アンナに憑依(ポゼッション)した魔物と対峙する瞬間を迎えた――。

9月中旬ロードショー

特別鑑賞券好評発売中

一般1,200円(当日1,500円の処)  
学生1,000円(当日1,300円の処)

歌舞伎町・コマ劇場広場前 (209)2131

新宿 シネパトス

連日 11:30 1:55 4:20 6:45

新装オープン

銀座三越先・三原橋地下

(561)4058

銀座 シネパトス2

★両館とも毎金・土オールナイト

連日 11:30 1:55 4:20 6:45